



洛河院百首

中

特別  
イ 4  
3163  
58(2)



景  
14  
2163  
58(2)

塘川院百首和哥中目錄

秋

立秋 七夕 萩 女郎花薄

刈萱 蘭 萩 雁 鹿

露 霧 橙 野 月

掃衣 虫 菊 紅葉 九月盡

冬

濃列飯沼氏  
表佐叔藏書

初冬	時雨	霜	霰	雪
寒蘆	千鳥	沙	水鳥	細代
神樂	雁鳥狩	炭竈	爐火	除夜



堀河院百首和歌中

秋

右秋

中々と葉は吹夕暮れ風なれと秋は自秋淨りたり 公實  
 朝やうに秋のころにせむお建八雲のく火を清りたり 匡房  
 結縷くくく愛神のこひさか我寝やもりや秋の 國信  
 所りよはくろもたう火吹凡の喜にそ秋はあま志那 師長  
 物事と記秋よ凡の涼し片鳩う秋よ成や志那ん 隆重  
 秋をよひきこの山の山物うに秋涼く吹河なふか 伴安  
 中々あうは後詠日せりともと約う記凡よ秋涼は 俊光

是とつけ菊の上葉は凡そ秋にけりとも今はと 師時  
 吹凡の葉の上葉は昔にけりとも日秋秋の古月登はと 辰仲  
 松かき詠じる常は秋にけりとも秋の上葉は昔にけりとも辰仲 基後  
 秋立とも今も昔も凡の昔も常もやと鳥か衣多辰仲 隆源  
 物も此秋は昔も今も凡の昔も常もやと鳥か衣多辰仲 隆源  
 秋の心も昔も今も凡の昔も常もやと鳥か衣多辰仲 隆源  
 かつとも昔も今も凡の昔も常もやと鳥か衣多辰仲 隆源  
 七夕  
 天の川あは流れてたけ七夕も今も昔も常もやと鳥か衣多辰仲 隆源  
 漢川来とも昔も今も凡の昔も常もやと鳥か衣多辰仲 隆源

七夕

織女に衣を衣た露けりとも今も昔も常もやと鳥か衣多辰仲 隆源  
 天の川あは流れてたけ七夕も今も昔も常もやと鳥か衣多辰仲 隆源  
 漢川来とも昔も今も凡の昔も常もやと鳥か衣多辰仲 隆源  
 七夕あはぬ列の涙もやと鳥か衣多辰仲 隆源  
 七夕あはぬ列の涙もやと鳥か衣多辰仲 隆源  
 七夕あはぬ列の涙もやと鳥か衣多辰仲 隆源  
 七夕あはぬ列の涙もやと鳥か衣多辰仲 隆源  
 七夕あはぬ列の涙もやと鳥か衣多辰仲 隆源  
 七夕あはぬ列の涙もやと鳥か衣多辰仲 隆源  
 七夕あはぬ列の涙もやと鳥か衣多辰仲 隆源  
 七夕あはぬ列の涙もやと鳥か衣多辰仲 隆源  
 七夕あはぬ列の涙もやと鳥か衣多辰仲 隆源

國信 師教 辰季 仲文 俊光 師時 辰仲 基後 隆源 辰後

穢女のき遊のたしう海邊をふじとりのひいしの穂ぬわら  
ふくくとむすやせむれ枕よりちりれぬくくさるん 河内 紀伊

萩

いしをなく海萩志をれち地の道初すりも城引り 公實  
川あふく鹿の志うみきてるり浮てなうれぬ萩萩の花 匡彦  
萩萩はまきいさうぬかたれとれめつ 國信  
二葉ゆりあさく山鹿は志うれとまのじ萩花萩花 師執  
萩も志うむじ風ううめ地落もらうさうさうさう 聖孝  
折もれとくいにさう萩の志成志をれせさう落の志う 仲定  
萩萩の志成の落よたのひくさう海もおぬすり 後教

師われいとも嘆くもろま萩のなわれ萩萩もたう  
あさうひまきさうある白落れたの萩の萩花うき 秋仲  
物落ようひらひらへ 棹鹿のじひらう萩の萩系 基俊  
綿のやひくく花とみゆかさう風う海の萩系 隆源  
まめゆひらううのわさ萩いさうひらう萩花う 紀後  
墨系落の志の心をく萩風は乱くさけら海の萩 紀伊  
さう月れ萩花さうの萩花のむさう衣さめ金さう 河内

女郎花

約かんじさうひの那の女書も一日も所 公實  
りくゆいの萩花いさう 女郎花萩さうさうさう 匡彦

夕されい伏見の里に女節花行して人さしつらむ  
 露志あはれあはれあはれ女節花一あしおし神楽  
 秋夢いづれのちの女節花秋夜は白く秋思  
 いふは今と又いふ女節花あはれあはれあはれ  
 こき野のうらみ思のよきあはれあはれあはれ  
 夕霧よあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
 あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
 秋夜は白くあはれあはれあはれあはれあはれ  
 夕霧よあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

幽信 師教 秋夢 仲実 俊教 師教 秋夜 肥後 隆源 基後

女節花白くあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
 秋のよきあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
 薄

紀伊 河内

夕霧よあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
 花すきあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
 これあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
 ひまわりあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
 風吹かあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
 秋夢いづれのちの女節花秋夜は白く秋思  
 いふは今と又いふ女節花あはれあはれあはれ

云實 匡房 幽信 師教 秋夢 仲実 俊教

一々ふまのくまのけ花落こ社ハ風の定かしく先  
 見こふにやなはれひとの志の落風よはえそそと酒の  
 らく鳴せよれりの志の落酒をうとう種よ出ん  
 花落中のく神と世の秋ハ新ら社ゆりた  
 夕暮の落まにまいた落やのふ酒をましく  
 社風にたひくをむと夕まくれ誰神ともあ  
 及のふ酒の落よけられそいふも世に  
 新萱

師時 那仲 基俊 澄源 肥後 紀伊 河内 云々 匡彦

形々毎よ志とるよ依くみらるハ社ろるもそつこ  
 好くれいあひみりる落るのト世あ人ののたろる  
 うつ落傷の想のあつるれ思ひみりる社夕暮  
 及此也や社風よ志とるくろる也の志とるあを親  
 朝毎よな々ハの世れあつる也とあつて君も  
 さあやよなれれとあり新萱れ酒の酒もなく  
 かつるも我の酒とさうとあ社の社風よそ  
 葉るこ草ろる景のろるもハ下れれはろる  
 社風よるあろる也社とまらん下れれくも  
 の行く落も社あれろる也のそとあはれく風よ

國信 師執 仲文 俊兼 那仲 基俊 澄源 肥後

色そよ吹枯風そよるも此のやうく流すのありき  
紀伊  
ともよれん風よふらうもやよしのとよとよ露の流  
河内

蘭

おさげさそよゆもあられぬ葉帯あふれぬわらふ  
二實  
ゆさうけくうハ新もあふれいとのあふれくも  
匡彦  
秋の舞ふじりくもゆか葉じりもれうも流るる  
國信  
ゆもあられおとよとあてぬ秋の舞風あふれ  
師教  
秋の舞よ書さる白くあふれりまよとよあふれ  
秋葉  
時毎にそよさういよけり葉秋のさうけり  
仲久  
ほけり葉よとよあふれりまよとよあふれり  
後れ

秋毎よあれさくもあふれりまよとよあふれり  
而時  
秋風よさうあふれりまよとよあふれり  
秋仲  
あさ風の目よ吹ハ葉さるあふれり  
秋後  
ゆもあられあふれりまよとよあふれり  
澄源  
龍田山麓よ白くあふれりまよとよあふれり  
肥後  
あふれりまよとよあふれりまよとよあふれり  
紀伊  
秋雲やあらくあふれりまよとよあふれり  
河内

萩

秋さそよゆもあふれりまよとよあふれり  
公實  
あふれりまよとよあふれりまよとよあふれり  
匡彦



秋の葉のうらむらむと  
 きぬふ葉のぬきぬき  
 山に吹たけりふをうく  
 妻日み葉のちを来し  
 葉のちを来し花よし  
 ろくしかなれ我葉の  
 今あひと葉のちを来し  
 枯凡のちを来し  
 枯今なれ葉のちを来し  
 叶とことこの葉のちを来し

國信  
師教  
孔仲  
仲交  
後教  
師時  
孔仲  
基後  
澄源  
肥後

秋のちを吹く凡も  
 さふあてさふらうけ  
 公貴  
 延房  
 國信  
 師教  
 孔仲  
 後教

雁

秋のちを吹く凡も  
 さふあてさふらうけ  
 公貴  
 延房  
 國信  
 師教  
 孔仲  
 後教

雲々これ名のり現つてゆへ唐の名おきつて此の地  
 春結しつて八幡の唐よはらひつたおれおらるん  
 字有よめつてふ初唐の我らいつて候てくねと  
 羽ふろと雲々これおきつ初唐の地よと今つていふ  
 初唐の地よとつけて雲井の人のおひさるよと云  
 ことよりや梅子の色よそなう唐八幡の地よといはれ  
 五五の家わららの山代唐金の書いもていふてく流  
 河田

唐

袖ふらつやゆふ今つて此書よと云の志けつて  
 加ふのらつかつていふてけつかつて唐書といふ  
 公貫  
 庄房

書よとて唐の地よといふの獨ねとてくおとてつて  
 夕陽書わらゆふ唐の地よといふと云の書と云  
 ともいふ東北のよと云れく書よと云の唐の地よ  
 高砂の尾よと云れつていふ何れと云の唐の地よ  
 よもつてゆらふよと云る唐の地よといふと云の  
 里川の地よと云るよと云る唐の地よといふと云の  
 世中此地よと云るよと云る唐の地よといふと云の  
 各よといふと云るよと云る唐の地よといふと云の  
 一河がくよと云るよと云る唐の地よといふと云の  
 三原山にわらふよと云るよと云る唐の地よといふと云の  
 肥後

國信  
 師執  
 歌季  
 仲実  
 後執  
 師時  
 後後  
 基後  
 隆源  
 肥後

多くいりて夜そそや揮展の書忘るそそ  
紀伊  
を迎のまのつこに昭展入りくよはるりぬ  
河内

落

ゆくれ風よまはる白雲のまはるる  
公實  
月夜にゆくら夜にまをん  
匡善  
霞もまはるる  
國信  
志のぬの物もあつる  
師教  
月吹はまをらるる  
秋季  
白雲を座よまはるる  
仲文  
也高也物まをらるる  
俊光

秋夜にまをらるる  
師時  
小原東志まをらるる  
秋仲  
沙草生茂志のまをらるる  
秋後  
白雲まをらるる  
隆源  
月夜にまをらるる  
秋後  
初日まをらるる  
河内

音

麓とけら河音ありて  
公實  
河音の歌のまをらるる  
秋後

石井の書いられし書札の... 國信  
 吉野の海... 師教  
 白旗の書... 師時  
 田代の書... 仲實  
 船... 後教  
 松書... 師時  
 夕書... 後教  
 あり... 隆源  
 河書... 隆源  
 書... 肥後

松書... 肥後  
 い... 何日  
 あり... 隆源  
 白... 隆源  
 山... 隆源  
 あ... 隆源  
 海... 隆源  
 あ... 隆源  
 権... 隆源

わさかしのむねはあはれ南にむかひてさき秋の流 師時  
秋の流をきかすにさきうらわのふみより権えぬ 那仲  
あひにれ流をいさめうらりてさきと朝城の引さす 基後  
わさかひはけりあさき花はけりあさきかきさきの南は流 隆源  
いしとさうたりてさきさき日新約書はあはれ権えぬ 肥後  
志のあまたさき川に流し権の目しけりさきさき新約に 紀伊  
いしとさきさきさきの流もさきさきさきさきさきさき 河内

助運

遠坂の雲はさきさき秋の由はさきさきさきさきさき 公實  
さきさきさきのさきさきさきさきさきさきさきさき 暹彦

遠坂の雲はさきさき秋の由はさきさきさきさきさき 國信  
秋の流をきかすにさきうらわのふみより権えぬ 師時  
あひにれ流をいさめうらりてさきと朝城の引さす 基後  
わさかひはけりあさき花はけりあさきかきさきの南は流 隆源  
いしとさうたりてさきさき日新約書はあはれ権えぬ 肥後  
志のあまたさき川に流し権の目しけりさきさき新約に 紀伊  
いしとさきさきさきの流もさきさきさきさきさきさき 河内

教者ぬ君うふあよと月物いづきの秋う遠坂の冥 紀伊  
遠坂の秋の村をよきげにうもふられやまらん甲斐 河内  
まらぬ

月

まらなり月うる村の秋のよの程れぬわら秋され 公實  
ゆもくう遠のほらぬうれと座すそ月の秋す程 匡房  
嵐吹いぬのぬれまてぬかた井の浦まよる月 國信  
天の赤るる月を誂れし秋のよぬよのすそ程 師於  
ぬの瑞よと月月のけねを誂る我を今とあそ 秋孝  
瑞よと小戸のうらなすまはゆゆは舟棹は舟 仲文  
木柁のそ候とふたのよとまてぬ月のめとまの物 俊光

雲のむらあふあふと月れ秋の清さハ 師時  
かじぬあつちの氷のゆきまれと座と月の秋す程 秋仲  
秋のよは園よと月月のあふぬよあふ山の瑞は 秋後  
いづくとも月ハ月ととつたれをけりん更科の山 隆源  
月氣ハ月と今たぬた思ひぬか後かすあさほり 秋後  
久世は月清とるるに瑞ハやと語めりるるのちとら 紀伊  
おむりよ木葉むらつじ音川のそとと等と秋の月 河内

持衣

しつちも妹ううらん唐衣とぬぬのきれかにあふと 公實  
まらつたちのむらとらぬぬじだれよとた雲のむら 匡房



我代重きと唱むし一の教されたる秋ハ社ねり 師時  
山里ハ藤田のうらやに乱もあつる出れらぬか 孔仲  
憔悴われのうきれハ我もさうもあらず 鳴あひ 甚後  
林うみかひまの虫の喜れまハ一毎にうらやたるハ 隆原  
まどろく人教もせぬ古<sup>たけ</sup>は松虫のうきやあぬ 肥後  
社ハ野々虫の言やなれしとて我物さハも催<sup>たけ</sup> 紀伊  
病行みみらん花や折 せん昔村毎にうらや 河内

三巻

志西のりハ會笑動ハ朝毎ハ落社花のうらやあられ 公貴  
弟月より白いあわ〜一葉れいじハ社事あつるゆえ 延原

凡人も位あつり一古にゆらうらやぬ白菊たれ 國傳  
奥山のそんハの庭の菊をれハ流を汲て菊あけらる 師光  
うすくあうらや菊も折く露ハ一色をぬむとて 取孝  
金さくハ公も候菊ハ昔ハ中老せぬ村のうらや 仲実  
まどろくハ雷よほらひハ白菊<sup>たけ</sup>ハかく我のたき<sup>たけ</sup>て 俊光  
あつらんハ社花ハうらや宿の菊はよもよも菊は花 師時  
白菊れ白くうらハ長月よほら候ハの菊ハなまきハ 孔仲  
岩の岩ハまろくは菊とていゆ<sup>たけ</sup>ハ思ひ<sup>たけ</sup>なるハ 甚後  
菊の心あつてわらうる菊の流とのひハうらや 隆原  
うらや<sup>たけ</sup>ハうらや<sup>たけ</sup>ハ白菊ハうらや<sup>たけ</sup>ハあつたハ 肥後



粟の首も更にあひらく獲の鳥成のけいそと  
くはくこうらふ首のねむしむいさこは社社粟も  
紀伊

紅葉

河内れぬやれくちれはすうれちの山は湯湯敷り  
唐の朝人雲霞をくすくすもねも河内れ糸のねらるは  
湯のこもあひらふめらるは紅葉にねらるす名は社社  
峯だきまわしれ山の紅葉は林麓の雲の錦もさる  
湯のぬるやれの山は紅葉を何あるくは河内れし  
白雲のうららのくちも湯はしやまの山は紅葉志  
古田に志くくはく社社のくちもねらるは紅葉もさる  
俊れ

あされやけりち社社れ山雲のくちもねらるは社社の凡  
お粟すうくくた山成社社れくちもねらるは社社の凡  
くまらあは河内れぬやれぬれは紅葉の照湯  
ぬれの上の山成の紅葉はくちもねらるは社社  
お粟れねあはくちもねらるは社社の凡  
くちもねらるは社社の凡  
社社の凡  
河内

九月盡

くちもねらるは社社の凡  
あはくちもねらるは社社の凡  
社社の凡  
俊れ

冬 紀伊 國信  
 冬 師執  
 冬 後教  
 冬 師時  
 冬 後仲  
 冬 基後  
 冬 隆源  
 冬 肥後

冬 紀伊 國信  
 冬 師執  
 冬 後教  
 冬 師時  
 冬 後仲  
 冬 基後  
 冬 隆源  
 冬 肥後

初冬

冬 紀伊 國信  
 冬 師執  
 冬 後教  
 冬 師時  
 冬 後仲  
 冬 基後  
 冬 隆源  
 冬 肥後

いけりり秋の名跡を詠ましと細ハ木葉も風吹  
 那へりや冬いさくん華葉も雪白霞乃新  
 北風あまきの松のお葉あまきと下草も冬さ  
 冬さくくいと青と秋吹のまは片葉神のさ  
 紅葉も皆枯れと母と来々木枯る海は成る  
 月も冬と冬はくめいゆの後の松は海もさ  
 後の男れお向舞るれとくしり冬にわゆる  
 時面

縁らる華葉のころやけりわゆるいと冬さくれば初時  
 云々

うらうりく華葉山の時ぬよ秋そめりし今と秋そ  
 深さこの時ぬてわらう子母ようらう海とさ初秋  
 冬はよハ時ぬよ華葉さくつと冬葉の初秋  
 あまきよ時ぬよ袖とぬれさるいと秋葉さく  
 水色の青葉の山し初冬月時ぬよあまきとくさる  
 木葉のさあましと初時ぬよ秋も初秋  
 秋も月時ぬぬのさるハ初秋さく華葉さくつとさる  
 時ぬよ目ぬいよとあまきとさるのさるハ秋  
 時ぬよとあまきとさるハ初秋ぬいよと秋葉さく  
 時ぬのさる木の華葉とさるハ初秋さく華葉さくつとさる  
 時ぬのさる木の華葉とさるハ初秋さく華葉さくつとさる

時ぬのさる木の華葉とさるハ初秋さく華葉さくつとさる  
 時ぬのさる木の華葉とさるハ初秋さく華葉さくつとさる

ありて一人かゝりて... 肥後 紀伊 河内

霜

ゆきらのけられ... 公實 匡房 國信 師頼 秋香 仲夏

神社

位者のふれ... 後執 師時 弘仲 甚後 隆源 肥後 紀伊 河内 平敷 云實

629  
金づく藤八門をさすれた者よりわら敷たりのり 送房  
あまりの穢入するもの志をてしとせと敷た道 國信  
をり物く今も物ぬ山里は冬の下すり敷きよ 師執  
命より敷たありて執神を衣より包じむとやわら 取季  
こよ敷き今も今も敷たも扶のうれは敷たありて 伴文  
意とてしむともぬ常あれた敷たもぬ物 俊執  
よ敷た敷たありて山里は敷た敷たは敷た敷た 師時  
おの敷た敷たの敷た敷た敷た敷た敷た敷た敷た 取神  
板より敷た敷た敷た敷た敷た敷た敷た敷た敷た 基後  
物より敷た敷た敷た敷た敷た敷た敷た敷た敷た 澤深

板より敷た敷た敷た敷た敷た敷た敷た敷た敷た 肥後  
うい敷た敷た敷た敷た敷た敷た敷た敷た敷た 紀伊  
ぬい敷た敷た敷た敷た敷た敷た敷た敷た敷た 河内

雷

海より敷た敷た敷た敷た敷た敷た敷た敷た敷た 公實  
いよ敷た敷た敷た敷た敷た敷た敷た敷た敷た 匡房  
吉敷た敷た敷た敷た敷た敷た敷た敷た敷た敷た 國信  
うい敷た敷た敷た敷た敷た敷た敷た敷た敷た敷た 師執  
志より敷た敷た敷た敷た敷た敷た敷た敷た敷た敷た 取季  
結より敷た敷た敷た敷た敷た敷た敷た敷た敷た敷た 伴文

集羽玉のつらきよよ香澄は名も埋もる 抱き給 後乾  
 香のれは皆多ううぬもあし引さる越の志 後 師時  
 昔蓬まきひう筆もみぬやと吉野の山に香ゆり 後 伴  
 奥山の松乃葉志のこころ香ふ人のあはるむは猶 其後  
 却多の香ゆりぬまは志うき此標の抱き給ぬん 隆源  
 及もたしくはれれち香に炊給くちんふよさひ引らん 肥後  
 白雪のうり志きぬれは昔蓬まきひう筆もみぬやと 紀伊  
 熊波江のあはるもあはるもむし社と為針よあはる 白河  
 雪の香の野への志は志ぬれは昔はゆきうふ給しすこのけり 公實

雪の香

雪の香く花はぬれとみりとも雪江の若公香を給せぬ 匡房  
 浦もくる雪江の若公香抱てぬくも冬之成はる 國信  
 津の雪は雪のこ凡吹度よ志ぬれ 若の志のこ 師乾  
 雪のせし若もみんかよ抱てくまはれとあはる 肥後  
 熊波江の浪もたかや乳あいのなきと海風は 伴  
 熊波江の繩もたかひく若公の浦もあしちのあ 後乾  
 雪の香よむひより若公抱てく海の池のあはるるか 師時  
 たふかへけけなまきう香とあけふあつひ若公抱 後 伴  
 雪風よ志ぬれとあはる抱の香も 其後  
 冬もきく葉の抱てし雪とくも雪の針とる雪 隆源

千名  
 余はよのまの昔の秘を秘すかりよる也  
この公の 河内  
 紀伊  
 肥後

志の浦の松吹凡のふりさく女海子名ちゆたき  
 月影のゆるれ浦を清くふる志たなくわけぬは  
 友子名もせきてたまふ海を沖乃白洲は信也満ん  
 小波をゆりぬるの浦の海風を渡り名も急は  
かきかた 衆ららに名も志いなく掛すりさく此河原に凡也  
せん 橋ちるや佐のう海をせうに曉けく名もなくあり  
 師教  
 孔孝  
 伴実

あな一吹小鶴う磯の漁子名も若る山彼も直さくけるを後れ  
 大井川にん後よたなるそてせれたよきわら名も時  
 凡のじいもやあふんきるる名もたの浦は千名志  
 勇ちく渡瀬もみぬ保川のちるかよのあも強  
 小やじい友也あふぬくはまの川原も名も  
志 白浪よあうちるて渡り名も磯のまらくちあも肥後  
 浦凡の味上の渡は名も海ららるるも名も  
此後 海は千名名の一も名もあまの海也  
 水  
 浦は千名名の一も名もあまの海也

河へ舟乗つて車はくすし砂のくさひ冬はあせし 匡房  
と波をひこ何の氷あつた朝雪の氷成吸くふよ 國信  
山雲のよの霞のきくれ八細雪川にまじりけり 師於  
浪あつて岩は障なくしらひ志く砂閉閉らる川の水 敬孝  
志さうなるたのわ條一系凡そそもの池も氷志なり 仲実  
流くおそ浦も流るるの雲るれが氷へて雪くさうか海 俊光  
山雲の岩の下あは流くおそ岩うら浪のきくたも 師時  
山川の波よるりけり舟舟凡のこ浪きもせぬそ 那伴  
雪雪ふようれぬるりしと朝みまは若分の砂障がけり 基後  
氷くさうに閉閉一そ日よるけひさききあは流り 隆源

冬場く砂やあひくさつらん雪終りそわらふ雪の 肥後  
奥山のあまようくあむまともや落しこゑのききき 紀伊  
あまにいくさゆさつらんたうれもぬるぬる川の水 河内

水鳥

朝戸朝く揚敷みる池あまよるり多のじれく鴨 公實  
あまのあまの床今さ枕うさ思ひしほの流るる 匡房  
水鳥はまきくけのさみゆましくも鳴のうめがうめ 國信  
池あにまされおろ雲の羽凡は若者の氷さや雪 師於  
よも流くおろわたり後氷をたたく羽雪の流るる 敬孝  
たうみくけつよといおるあらしはまきくも羽凡のあま 仲実



志られ若くも一けふにあらはれ鴨がさそ流て  
 川のせのまらとゆれとつたひす鴨の羽よも  
 水多ハ赤のさそ重さくといりあはれつたひ  
 もみりさひされとあをたしめいりあはれ  
 浦山一志あみさるもあはれとく行りせうあ  
 池多にせれくたひある水多の羽は流ちさ  
 池水のうたひあはれいりあはれつたひのさ  
 さるものもあまきのうたあはれ浪のたさ  
 細代  
 ものけの年のよりたしあはれ細代は浪や強  
 云実  
 河内  
 肥後  
 隆源  
 基後  
 那仲  
 那時  
 後頼

さ海やまの海のある本は浪ともしわいさ  
 田一の浪たわらる本は浪とつ我のさくす  
 細代本は浪たわらる田一のその松は本を  
 舞火のさくあはれ水多のさそ細代のり  
 凡吹田と川のあはれ本は浪のさそり  
 はみまたつたひ細代の本は浪のさそり  
 水多のさくあはれ田一のさそり  
 ちよふと田一のあはれ本は浪のさそり  
 山は本の葉たわらる川の細代は本の  
 多浪のさそあはれ細代は本のさそり  
 隆源  
 基後  
 那仲  
 那時  
 後頼  
 仲美  
 那季  
 那時  
 那仲  
 那時  
 後頼  
 仲美  
 那季  
 那時  
 那仲  
 那時  
 後頼

少真のより川流みゆる細代本はち白浪の打も  
細代本は浪のよりくやうわくわあはあはあ  
源もなく白浪くろ細代本と少真のよりくわの  
肥後 紀伊 河内

神樂

天つる神のりよりくもやな火の煙もくもゆん  
曉の早もくもぬ柳の霧もく柳袖のまもり  
柳のまもりくあは冬の上天のいんもめ  
干早振神のりもな火あくく育れ神まけけ  
終末もく柳葉もくわのけきもやハ神のりも  
庭中あく天の岩乃神まはあもくもく柳も  
公実 匡房 國信 師範 辰孝 伴実

うらみは神あつれんもものまもりのまつは火白く  
ゆりけくあふ社の神まもくはあさ余の面白  
志くはくもくぬくの枝はぬもりくくハの美の  
よ成もくもく柳葉もくあはあもくもくハ  
度ああの庭中人の光あもくけくあつる神ま  
柳葉もくもくぬくの枝はぬもりくくハの美の  
柳葉もくもくぬくの枝はぬもりくくハの美の  
さくはくもくぬくの枝はぬもりくくハの美の

鷹守将

将言くくも羽の言もくもくハの面白くも  
公実



炭竈の煙をくわく母をさうらうくとも思ひつらうか 後頼  
 すこふ後まを煙をくわく母をさうらうくとも思ひつらうか 師時  
 とのひきは冬社まをくわく母をさうらうくとも思ひつらうか 歌仲  
 とみ電は薪をくわく母をさうらうくとも思ひつらうか 甚後  
 炭竈の口をくわく母をさうらうくとも思ひつらうか 隆源  
 み山も炭竈をくわく母をさうらうくとも思ひつらうか 此後  
 にも山の冬をくわく母をさうらうくとも思ひつらうか 紀伊  
 炭竈の口をくわく母をさうらうくとも思ひつらうか 河内

燭火

燭火の下にうらうらひやうと消えまゝのこゝろ 初めは 公実

わよびくほくたきうらうと燭火の舟をのりふくれ社 廷彦  
 いよとをけり燭火をたきふくれ社をのりふくれ社 國信  
 燭火の下にうらうらひやうと消えまゝのこゝろ 師執  
 山室に揚めうらうらひやうと燭火の舟をのりふくれ社 歌季  
 いよとをけり燭火をたきふくれ社をのりふくれ社 伴實  
 いよとをけり燭火をたきふくれ社をのりふくれ社 後頼  
 燭火の舟をのりふくれ社をのりふくれ社 師時  
 下よとをけり燭火をたきふくれ社をのりふくれ社 歌仲  
 燭火の舟をのりふくれ社をのりふくれ社 隆源

即火の下のわきまを志しけり消しやすしとわたりぬ  
 後 紀伊 紀伊 紀伊  
 終果うたつれなき煙火の下のわきまを志しけり  
 何月

漆夜

ありし中い善の福いふことく計法と違ふ利公美  
 吉野川より行くすは建物の直の敷き善は時  
 何事と結とと女川の善事として直もくすよゆよゆ  
 けりあてして我はたれう年月八我勢はのこく  
 國信 師乾  
 同書地いさるこそうえれれとて善のくはる我勢  
 敬妻  
 中道と承明人のんか下りてとて善はたもとと承明の  
 仲実

こと世のむむのうたに記よあり是の情をくも後  
 後 後 後  
 良くはくまの隣よ我にけりて我計やぬとて  
 師時  
 月よあ月十月わすりて二月のみそ次たる公と我  
 敬伴  
 いづれも行むあうさぬ人いあうとて我計のむくも  
 善後  
 みのりもちしそちほほめをけれうとて公直に後  
 隆源  
 色ぬきハ我勢の老とたる我を何故あむ我勢を結  
 此後  
 けりる也我世も結とく我を何とて善は善後  
 紀伊  
 かなるに後と結とぬとて善は善後とて善は善後  
 何月

松川院目録和歌巻中終



